教職研究　第29号
立教大学教職課程 2017 年 4 月

英語科教育法における模擬授業と学びに関する考察

吉住　香織

1 はじめに

省察（リフレクション）が教師の成長と専門性の向上のために果たす重要な役割については、近年広く認知されている。実際、教師をめざす学生が学ぶ大学の教員養成課程においても、履修生の成長を促す省察の意義や理論はかなり普及してきた（神保他 , 2011）。とりわけ模擬授業や録画映像を取り入れた省察は、履修生の成長を促すよい機会と言えるであろう（髙木 , 2015）。模擬授業は教師をめざす学生にとって、学んできた知識や技術を試す重要な実践の場であり、さらにその経験から自分の授業指導のあり方を批判的に理解し、その後の学びと成長に活かす貴重な省察の機会となり得るからである。

しかしながら、授業数や履修者数など様々な事情から、履修生１人当たりの模擬授業の回数は現実には限られている。教職課程在籍中に１～２回の模擬授業しか経験できない場合もある（及川 , 2013）。筆者が「英語科教育法」を担当する首都圏の大学でもその状況は大きくは変わらない。教職課程に在籍中に履修生が経験できる模擬授業は多い場合でも３回程度である。回数が限られている模擬授業を履修生の学びと成長につながる貴重な省察の機会としていかに活かすことができるかは、教職課程で教科教育方法を担当する者に共通の課題と言ってもよいだろう。

リフレクティブ・プラクティスは「教師が教室での経験をふり返り、自身のティーチングに対する理解を深めることによって成長を志向する（玉井 a, 2009）」授業研究法の１つである。筆者は、教師の成長を促す省察の手法として広く認められているリフレクティブ・プラクティス（神保他 , 2011）の発想を、担当する「英語科教育法」の模擬授業に取り入れ、学び合いと段階的な振り返りを通した履修生の学びの深化と成長を目指してきた。このような模擬授業経験から、履修生はどのようなことを学んでいるのだろうか。それは彼らの成長を促すものであろうか。

本稿では、模擬授業からの履修生の学びに焦点を当て、模擬授業とその省察を通した履修者の学びの全容を明らかにすることを目指し、また学びを促す要因について検討する。具体的には、全ての模擬授業の終了後に履修生を対象に実施したアンケート調査のデータを質的量的な混合研究法を用いて分析した結果を報告し、模擬授業とその省察を通した履修生の学びについて考察する。

結果は、学び合いと協働の中で自他の模擬授業を体験しリフレクティブ・プラクティスの視点に立つ省察を段階的に行うことは、履修生の重層的な深い学びを引き出し、自律的な成長プロセスを促す貴重な契機にもなり得ることを示

唆するものであった。

2 研究の目的

本研究の目的は以下の 2 点である。

(1) 英語科教職課程で学ぶ履修生は、自他の模擬授業からどのようなことを学んでいるか。

(2) 模擬授業を通した学びをより深化させる要因や背景はあるか。もしあるのであれば、それはどのようなものか。

3 研究の方法

3.1 研究環境

3.1.1 授業の概要

本研究が対象とした授業は、2016 年 9 月から 2017 年 1 月までの期間に後期（秋学期）科目として開講された「英語科教育法 2」（半期・2 単位）である。本授業は、中学・高等学校の英語科教員免許状の取得を希望する教職課程に学ぶ履修生の中で特に中学の英語教員を目指す学生にとっては必修の授業であり、多くの場合 3 年生が受講する。英語科の指導に直接関係している必修の授業としては、本授業同様後期に開講される「英語科教育法 1 演習」（後期・2 単位）がある。本授業および「英語科教育法 1 演習」はいずれも、前期（春学期）に開講される「英語科教育法 1」（前期・2 単位）を修得した者のみが受講できる。

本授業では特に、英語教育の知見や研究成果をふまえた理論学習や指導技術の習得を通して、中学校での英語授業指導に必要な実践力を養うことを目指した。授業は主に討論やワークショップスタイルの演習など、履修生参加型形式を取り入れた授業と履修生全員が行う模擬授業を柱として構成されていた。後期 14 週、計 14 回の授業を行ったが、その中の 5 回分を模擬授業の実施に割り当てた。模擬授業前の 4 回分の授業では、模擬授業実施に向けて、指導内容や背景理論、指導技術を学ぶと共に、現場の授業 DVD 視聴と分析（2 回）を通して実践的な理解を促した。模擬授業後の授業では、「模擬授業全体についての振り返りとまとめ」、模擬授業で扱った内容に関連づけた「指導と評価」についての講義と演習、最後のまとめでは「英語教育における重要概念」をテーマに、第二言語習得理論を含む英語教育上の重要概念の中で、特に模擬授業で扱った授業指導に関連する内容について、履修生によるリサーチ、および発表を行った。

3.1.2 模擬授業の概要

模擬授業の概要を説明する。履修生全員が、単独、またはペアで、中学で扱う新出文法項目について、口頭導入、定着のための口頭練習、産出のためのコミュニケーション活動までの部分についての授業を行う。実施時間は、単独での模擬授業を希望した場合は 14 分間、ペアでの模擬授業を希望した場合は 16 分間である。指導内容の中でも特に、文脈や場面を活かした英語による口頭導入と、task を取り入れたコミュニケーション活動指導までの一貫性を重視させた。また、模擬授業の目的を十分理解した上で、目安として授業全体の 70% 前後は英語を使って授業を展開することを求めた。模

擬授業期間が始まるまでの計4回の授業、およびDVD視聴から学んだ授業指導に関する知識や技術（task活動や練習のさせ方、ビジュアルエイズや補助教材、板書計画ほか）を活かして、履修生はそれぞれ、指導案の作成・検討を経た後、練習を重ね、各自の模擬授業本番に向けた準備を進めていった。

模擬授業実施に伴う主な手順と内容は以下の通りである。

1) 模擬授業で扱う項目の選定：履修生は指定された8つの文法項目（＝①受動態 ②不定詞（目的を表す副詞的用法）③関係代名詞主格のwho ④比較 ⑤疑問詞where ⑥過去形 ⑦三人称単数現在のS ⑧経験を表す現在完了形 ）の中から自分が希望する1つを選んだ。

2) 模擬授業担当の決定：同じ文法項目を希望する者の中で、ペアで行うか単独で行うか、各自の希望で決定した。

3)「学習指導案（1st version）」の作成・検討・提出：履修生全員が導入から産出段階までの「学習指導案（1st version）」を立案して持ち寄り、内容を検討し合った。また授業担当者が適宜助言した。※「学習指導案（1st version）」は授業担当者が持ち帰って検討の上、次の授業時に再度助言した。

4) 最終版「学習指導案（final version）」の作成と提出：「学習指導案（1st version）」についての助言と学び合いを受けて、履修生は、Teacher talkのscriptや板書計画、模擬授業で活用を義務づけたworksheetの構想案を盛り込んだ最終版の「学習指導案（final version）」を作成し、提出した。

5) 模擬授業の練習：実施当日に向けてそれぞれが自主練習とリハーサルを行った。※練習のために授業の前後の時間に模擬授業を行う教室と同じ仕様の教室を確保し練習環境を整えるようにしたが、授業が重なっていない限り、実際多くの履修生が積極的に利用していた。

6) 模擬授業の実施：毎回3組（ペア／単独）の模擬授業を行った。当日の模擬授業の担当者は使用するworksheetを、開始前に全員に配布し、他の学生は、事前に生徒役、観察役に分けられた他の学生は指定された座席で授業を受けた。※模擬授業は録画された。

7) 模擬授業終了直後の省察のための振り返り：各自の模擬授業の終了直後、まず2分間程度、授業者も含めて省察の為の時間をとった。その後、模擬授業のよい点と改善が望まれる点について、学生数名と指導教員が口頭でコメントを述べた。さらに模擬授業についての「リフレクションシート」(B6版)を授業者を含む全員に記入させた。※終了後集めた「リフレクションシート」と模擬授業の録画映像は、模擬授業実施者が持ち帰った。

8) 省察のための「模擬授業（MT）振り返りシート」（補遺参照）の提出：学生・授業担当者からのコメント、履修生全員のリフレクションシート、模擬授業の録画映像などを参考に、模擬授業の担当者各自があらためて自分の模擬授業について省察し、終了2週間以内に「模擬授業振り返りシート」を

「リフレクションシート」と共に提出した。
※模擬授業期間中の全5回中は毎回、この1）～ 8）までの流れを繰り返した。

9) 模擬授業全体の総括：履修生全員の模擬授業が終了した後の授業で、授業担当者は履修生と共に模擬授業全体を振り返り、模擬授業の総括を行った

10) 省察のための授業アンケートの実施：本授業及び模擬授業からの学びについて、履修生の省察を目的とするアンケートをあらためて実施した。内容は 5 件法での回答を求める質問と記述式回答を求める質問で構成されていた。本研究に直接関連するアンケート中の項目と内容については、対象データ（データ 1 とデータ 2）として利用した。詳細は後述する。

3.2 参加者

研究の参加者は 24 名 で、全員が大学の英語教職課程に学び英語科教育法を受講していた。履修生の多くは 3 年生で、その大半が 4 年次に中学、または高等学校での教育実習を予定している。

3.3 研究対象となるデータ

対象となる 2 つのデータは、いずれも、全ての学生の模擬授業が終わった後に行ったアンケートである。1 つ目のデータは、5 つの質問項目に対して履修生に選択式で回答を求めた。2 つ目のデータは記述式アンケートである。2 つの質問に対して履修生に記述式の回答を求め、さらに自由記述を加えた。本稿ではこれ以降、前者をデータ 1、後者をデータ 2 と呼ぶ。また本アンケートは、授業課題の一環として行ったものであるため、実際のアンケートには本研究がデータする以外の質問項目もあったが、今回は、本研究に直接関連する 7 つの項目のみをデータとして用いてある。そのため質問の番号については、一部、元のアンケートと異なっている。

データ 1 の 5 つの項目中、質問 1 だけは、模擬授業を実施した時点における参加した回答者の状況を把握することを目的としていた。具体的には「あなたは今回の模擬授業以前に、他で（例：英教 1A 授業）英語の模擬授業を行った経験がありますか。」という質問に、「初めて」～「4 回以上」までの 5 つの選択枝の中から回答者が自分の状況に合う答えを選ぶ、というものであった。その他の質問 2 から質問 5 まではいずれも、模擬授業に関連する質問に 5 件法で回答する形式である。質問 2 は「模擬授業の録画映像は、自分が模擬授業をふり返る上で参考になったと思いますか。」、質問 3 は「他の学生からのコメントは、自分の模擬授業をふり返る上で参考になったと思いますか。」、質問 4 は「授業で自分が模擬授業を行ったことは、自分の授業力を向上させる上で役に立ったと思いますか」、そして質問 5 は「模擬授業全体（前後の授業を含む）を通して、英語の授業について新たに学んだ、あるいは気付いたことがあったと思いますか。」という内容である。質問 2 から質問 5 についてはいずれも、ｱ）大いに思う、ｲ）思う、ｳ）どちらとも言えない、ｴ）あまり思わない、ｵ）全く思わない、から回答者が自分の状況にもっとも近いものを選んで回答した。

データ 2 の内容は、質問 6 が「模擬授業全体（前

後の授業を含む）を通して、英語の授業について新たに学んだ、あるいは気付いたことはどのようなことですか。」、質問７は「模擬授業を通して、自分はどのようなことが向上した、あるいはできるようになったと思いますか。簡単に記述してください。」であった。また自由記述は、模擬授業全般について自由に回答できるものである。いずれについても履修生は記述式で回答した。特に文字数等の制限はしなかった。

データ１の１から５までの質問はいずれも質問6、質問７に対する回答内容と関連があるが、特に質問４と質問５の回答については、質問６と質問７の回答を分析・検討する際に、根拠となる事実認識の裏付けを提供する役割を果たすことを期待した。

また、参加者の回答記入は授業中には行っていない。周囲に煩わされず、じっくり考えて回答してもらいたいと考えたからである。授業ではアンケート用紙を配布して実施者が主旨を説明し、１週間後の授業時に回答用紙のみ提出してもらった。なおデータ1、データ2はいずれも、模擬授業を中心とする半期の授業全体の省察を目的として課した授業課題であり、履修生に省察の機会を提供することを第１の目的としている。授業実施者として得たデータを研究することで、履修生の模擬授業からの学びと省察の内容を読み取り、さらに実施者が今後模擬授業を実施する際の授業の改善に役立てることを目指したものである。

3.4 データの分析方法

本研究では量的質的な混合研究法を採用した。データ１については集計結果を一覧表の形で示した（補遺参照）。データ２に対しては、テーマ分析法を用いて分析した。具体的には質問中のキーワードに加え、文章テキストの記述を何度も読んで、浮かび上がってくるテーマをまず探した。次に各テーマ別に、文章テキストに含まれる似通ったテーマを見つけ出すコーディングの方法を用いて、記述を分類しながらサブテーマを探した。同じサブテーマについて回答の傾向と要点をつかむために再度コーディング法で分析し、共通すると思われる項目にコード番号をつけて分類した。なお、記述者の特定化をさける為、また多くの記述がある場合は全てを掲載せず、典型的な記述を代表例とした。そのため、分析者の責任において記述文の一部を割愛し、また要点をしぼる形でまとめたものもある。

４ 研究結果

データ 1, データ２の順序で、分析した研究結果について報告したい。

4.1 データ１について

データ１は模擬授業実施前の状況、および実施後の振り返りに関連する５つの質問項目に対する回答である。詳しい数値は、表１（補遺参照）に示した。ここでは結果と数値に表れた傾向について報告する。

質問１では模擬授業前の回答者の状況を把握することを目的として、今回の模擬授業実施以前に経験した英語の模擬授業の回数を尋ねた。結果は平均が 1.1 となり、履修生の多くは今回以前に１度以上は模擬授業を経験したことがあ

ることが分かった。だが一方で4人に1人の履修生は、今回初めて模擬授業を行ったことが結果に示された。データ2の結果を分析・考察する上で考慮すべき事項である。自分の模擬授業の録画映像が振り返りの際の参考になったかどうか尋ねた次の質問2では、平均値は4.4、また回答者全員が参考になったと答えており、授業振り返りにおける授業映像の有用性を物語るものであった。質問3では、口頭やリフレクションシートを用いて示された他の履修生からのコメントがどの程度参考になったかを尋ねたが、平均は4.4とやはり高く、91％の回答者が他の学生のコメントが参考になったと答えていた。ピア・フィードバックを通した学び合いもまた、模擬授業の振り返りに有効であることが読み取れた。質問4は「授業で自分が模擬授業を行ったことは、自分の授業力を向上させる上で役に立ったと思いますか」、質問5は「模擬授業全体（前後の授業を含む）を通して、英語の授業について新たに学んだ、あるいは気付いたことがあったと思いますか。」という内容である。いずれも模擬授業からの学びを履修生がどの程度認知しているか、数値で示す目的で設定した質問であった。前者については、結果が示す平均は4.41、履修生の91% は何らかの点で授業力の向上を認知していた。また、質問4にｳ)「どちらとも言えない」と回答した2人の履修生についても、データ2の記述回答には、「時間配分が向上した」「英語使用の重要性がわかった」といった模擬授業後の向上点や気づきを具体的に記載していたことを付け加えておきたい。後者の質問5に対する回答結果では、平均値は4.16、しかもｴ)、ｵ）を選んだ回答者は1人もいなかった。8割近い回答者は授業について新たな学びがあったと受け止めていることが読み取れる。では実際、回答者は模擬授業を通して何に気づき、あるいはどのようなことを学んだ、と受け止めているのだろうか。データ1の結果を踏まえながら、次にデータ2の結果について報告したい。

4.2 データ2について

データ2は、模擬授業についての記述式アンケートで、2つの質問に対して回答者に記述式の回答を求めるものと、任意の自由記述であった。質問の内容は、質問6が「模擬授業全体（前後の授業を含む）を通して、英語の授業について新たに学んだ、あるいは気付いたことはどのようなことですか。」、質問7は「模擬授業を通して、自分はどのようなことが向上した、あるいはできるようになったと思いますか。簡単に記述してください。」である。自由記述も含めて記述された回答を何度も読み、テーマ分析法を用いて分析した。その結果、質問項目のキーワードである「学んだこと･気付いたこと」「身に付いたこと」に、「課題と抱負」を加えた3つの大きなテーマが浮かびあがってきた。さらに各テーマ別に、テキストに含まれる似通ったテーマを見つけ出すコーディングの方法で分析した結果、「授業全般に関わること」「授業実践：特に指導内容や指導方法に関わること」「授業実践：特に運営や指導技術に関わること」「自分自身に関わること」「模擬授業経験の意味」「今後の課題」の6つのサブテーマが浮かび上がった。さらにサブテーマについて記述した内容を読み込み、共通要素がある場合にはキーワード

を内容の項目として示した。

模擬授業からの学びを回答者がどのように捉えていたか、データ２の分析結果を報告したい。報告は、テーマ、サブテーマ毎に、分析した内容の傾向や特徴と共に具体的な記述例を示す形で行う。なお、引用した記述例については、仮名遣いや文章上の大きな誤り以外は回答者の記述をそのまま記すことを原則とした。ただし、同様の記述が多い場合は共通項でまとめ、他の項目にまたがる記述の場合は途中で切って短くまとめた。

4.2.1 模擬授業を通して学んだこと、気づいたこと

１授業指導全般に関わること

記述からさらに浮かび上がってきたキーワードは「生徒目線」「教師の役割と資質」「英語使用とコミュニケーション」の３つであった。

1) 生徒目線の重要性：

半数の回答者が、学び手の側に立つ視点から気づいたことについて記していた。特に生徒目線で考えることの重要性や生徒の立場からの分かり易さに言及するものが目立った。

- 教師が教えやすいと生徒が分かり易いは異なることをあらためて学んだ。
- 模擬授業前や模擬授業準備をしている最中どうしても教師側の都合のよい方に考えがちになっていたが、模擬授業後はいかに生徒の気持ちになって考えることが大事なのかがわかった。
- 生徒の目線に立つと目から入ってくる情報は効果的だと感じた。

また回答者は、現実に模擬授業を行ったことで、生徒視点に立つ授業実践の難しさにも気づいていた。

- 生徒目線で授業をすることはとても難しいと感じた。それは決して一方的な説明ではなし得ないと思う。
- 大学生だから答えられるが中学生だったら答えられるのか、という質問もあって目線を中学生まで下げることの大変さがわかった。

この点に関連して、楽しさ、興味や関心の喚起など生徒への動機づけの重要性や必要性を指摘する記述も複数あった。また 生徒理解の大切さを記した者もいた。

- やはり英語の授業は楽しくなければいけないと強く感じた。楽しさが生徒１人１人のモチベーションに直結していることをあらためて学ぶことができた。
- 英語学習を通して楽しさを教えることが大事だと思う。
- 生徒の視点に立ってどの指導法が効果的か、どんな話をしたら生徒が食いつくか、どんな説明が分かり易いのかなどを考えながら授業を作り上げていくことが大事であるとわかった。

生徒視点の重要性に気づくとともに、教師役だけでなく生徒役を経験した上で、あらためて授業を作る難しさを自覚した記述も目立った。

2) 教師の果たす役割や求められる資質：

英語の授業指導の中で教師がどのような役割を果たすべきか、その責任の重さに思い至ったと記した回答者や、教師の仕事の大変さに気づいたと記した者もいた。

- 英語の授業とはいかに文法を正しく伝えるか、を教えることができることだと思っていたが、模擬授業を通して教師次第で教え方は無限に広がることを学んだ。
- 授業者次第で生徒のコミュニケーション能力は高めることも低めることも出来ると知った。
- 現役の先生方がさりげなく使っていたフラッシュカードやイラスト１つ用意するのも意外に大変なんだとわかった。

またそのような実体験を通してあらためて、英語力や教師に求められている資質について記した内容も複数あった。

- 教師として誤った英語を使用しないだけの正しい英語力を持っていることの必要性を強く感じた。
- 生徒が発言しやすい雰囲気を作る、というのは教師の態度だけでなく、発問のレベルや尋ね方も大きく影響することがわかった。
- 緊張しても英語を使って明確に指示を出せるようになる必要があると分かった。
- どの段階でも指導技術をつかうためのクリエティブさが求められている。
- アドリブでその場を盛り上げることができることも必要。
- 生徒役を通して、生徒が予想もしない答を発した時、教師が何もなかったかのように進めていくのは難しいと思った。
- 授業中、教える事に手一杯にならず、常に生徒と向き合い臨機応変に対応できることが大事。

3) コミュニケーションを意識した教師・生徒の英語使用：

複数あった記述の中で顕著だったのは、授業をコミュニケーションの場と捉え、コミュニケーション能力を育成する観点からインターラクションの重要性や teacher talk を含む教師、そして生徒の英語使用に関する気づきであった。とくに最初に引用した記述例には、その意味が集約されていた。

- 授業全体がコミュニケーションだと思った。
- 生徒との interaction を通した communicative な授業を行うことの重要性に気づいた。
- interaction 通して英語を身に付けると記憶に残ると、模擬授業で生徒役をやって実感した。
- 生徒とどうコミュニケーションをとるかは、今までなかった観点だった。
- 従来の授業よりも生徒対先生、生徒同士のコミュニケーションを重視した授業にすること必要。
- 英語を使ってぺらぺら喋るのでなく、生徒のためにたくさん準備して生徒とコミュニケーションをとる教師が生徒の心を開き、楽しい分かり易い授業が行えると思った。

英語の言葉としての役割に焦点を当てた気づ

きを記した者も複数いた。そして生徒の英語使用を促す機会を与え生徒の英語力を高めるためにも、やはり教師の役割が問われる、と結論づけていた回答も複数あった。

- 英語は生きた言語であり、形式を覚えるより使うことに重点をおくべきである。
- コミュニケーションの為の英語が大切だと思った。
- 授業中に教師が英語をできるだけ使うようにすることの重要性。これまでよりspeaking や listeningの力も鍛えることができるようになることに気がついた。
- 生徒に英語を実際に使わせながら考える授業方法は、より生徒の英語運用を促すと感じた。
- 身に付けた知識を生徒が実用できるような授業をすることが重要で、生徒が英語を話す時間を多く取る必要性を感じた。
- 教師次第でコミュニケーション力は高められると思う。
- 教師が沢山準備して生徒の心を開きコミュニケーションを取れることが大切。

２「授業実践：指導内容や方法に関すること」

履修生が行った模擬授業は14～16分程度で、授業全体の大きな流れはある程度決められていた。今回の模擬授業では特に、文脈や場面を活かした口頭導入の指導を最も重視した。予想されることではあったが､多くの履修生にとって、それは未経験で新しい指導方法であったことが結果から読み取れる。そのためか回答者の記述数は非常に多かった。分析から浮かび上がったサブテーマの中で記述の内容に共通した項目毎に、履修生の学びや気づきの内容と典型的な記述例を紹介する。

1）授業の流れや組み立てへの意識：

本模擬授業では、期待されている達成目標が模擬授業以前の授業で示され、それを実現するための授業の大きな構成は、ある程度まで決められていた。回答者の記述は、学習指導計画を作成する際に、必要な「流れ」や「組み立て」をどのような視点で考えるべきかについて、あらためて自分達で意識しながら模擬授業に取り組んでいたことを示していた。

- 最初から最後まで一貫した流れがあると楽しめて分かり易い授業になると思った。
- 今まで授業を受ける側の気持ちしか分からなかったが、模擬授業をやってみて授業の中の１つ１つの流れに意味があるということがわかるようになった
- 授業の組み立てに目を向けるようになった。
- 英語教員には、新出文法項目を使いやすい授業構成が求められると思った。

2）音声や文脈・場面を重視する口頭導入やコミュニケーション活動の指導：

模擬授業ではたとえ同じ文法項目を扱っていても、導入から展開までの授業指導の手法やその内容は履修生によって異なる。回答者の８割以上は、特に授業指導の内容に関して模擬授業を通して気づいた点やあらたに学んだことについて記していた。記された内容に応じてさらに大きく２つの項目に分け、以下代表的な記述例のみ紹介したい。

●音声重視や適切な指導のあり方：

・文字を見せないところから始まる授業はあまりないことなので驚いたが、音声から意味を推測していく方が印象深く頭に残りやすいと実感した。

・生徒の視点からどの指導法が適当か考える必要がある。

・以前は分かり易い説明をすることが重要だと感じていたが、今はいかに生徒が文法事項に気づけるようにできるか、導入部分の大切さに気づくことができた。

・これまで全く知らなかった導入方法についての新しい知識や考え方を学んだ。

・演繹的理解より帰納的理解の方が生徒の記憶に残る。

・コミュニケーション活動は説明に時間がかからないシンプルな活動の方が生徒に分かり易いと気づいた。

・自分では思いもつけないような発想による導入法やコミュニケーション活動を見ることができてとても参考になった。同じ文法項目でも色々な導入法が可能であること。

● 文脈や日常と関連がある場面の重要性：

・特に導入の際は、生徒の興味をひく理解しやすい文脈を考える必要があると思った。

・自分が中学時代に学んできたのとは全く違う形で意味と場面、機能を結びつける方法があると知った。

・やはり導入は生徒になじみのある内容だと引き込むことができると思った。

・target となる文法が使用される自然な場面を設定することが重要と分かった。

・場面や文脈があると使用例から気づきを引き出すことができる。さらにそれを繰り返すと記憶に残るようにできると分かった。

・教える文法が使用される自然な場面を設定することが重要と分かった。

・生徒に身近な話題や日常生活と関連する活動を設定するのは重要だが、難しい。

・英文法を教えるのではなく、英語という言語を教える授業。前者は塾でもできるが後者は学校ならではの教え方があると思うから、OI でストーリー性を持たせたり、会話の中で気づかせたりがとても大切だと思った。

3「授業実践：授業運営、指導導技術に関すること」

授業の運営や指導に必要な細かい技術については、ある程度まで練習での習熟が可能であるが、やはり実際に教師役、生徒役を両方経験できる模擬授業であるからこそ気が付くきっかけとなることが多い。典型的な記述例を項目毎に紹介する。細かい点にまでよく気がついていることが、回答者の記述から読み取れた。

1）指名方法：

・生徒を指名する時にもうまく聞かないとほしい答えもかえってこないと言うことを痛感した。

・生徒の指名の仕方ひとつで、生徒の“当事者意識”は大きく違ってくると感じた。

2）板書 , 掲示資料などの活用：

・黒板の書き方、特に見やすさを意識する必要があると感じた。

・ジェスチャーや図を使うことが大切だということを学んだ。生徒の立場に立って目か

ら入ってくる構成が効果的だと感じた。

・板書の際の絵やカードの使用や文字の色分けや大小の使い分けなど、単純だが小さい工夫が、生徒の授業への集中度合いや理解度を高めることになると学んだ。

3) 生徒の視線への意識：

・授業をやるとどのように生徒が注目するのかがわかり、その視線は実際にやらないとわからないことだと感じた。

4) ワークシート：

・実際に生徒として模擬授業を受けてみるとワークシートの内容ややりやすさが気になった。

4.2.2 模擬授業を通して身に付いたこと、向上したこと

記述内容を検討した結果、そこから共通に浮かび上がってきたサブテーマ、またその中で記述に共通する内容として浮かび上がってきた項目は、大半が前述した4.2.1「模擬授業を通して学んだこと､気づいたこと」と重なっていた。だが、模擬授業を通して「身に付けた」あるいは「向上した」点を記した回答数は、模擬授業を通して「学んだ」あるいは「気づいた」ことの回答数より明らかに少なかった。全体的な特徴としては、多くの履修生が言及していた生徒の立場に立つ指導と、模擬授業の焦点である指導内容に関する記述がここでも多かった。先程と同様に１～４の各テーマについて、記述内容共通のサブテーマ、さらにキーワードを項目として示しながら、内容の要点と傾向、典型的な記述例を紹介したい。

１授業指導全般に関わること

気づきで多くの履修生が言及していた生徒の立場に立つ指導と、今回の模擬授業の中心となる指導法に関する記述が多かった。

1) 生徒目線に立つ授業や指導

模擬授業を通して、生徒目線という視点が加わったことが授業指導や実践にどのような形で表れているか、を伝える記述が多かった。

・生徒目線で授業を考えられるようになった。

・生徒目線でわかりやすさを意識した説明を考えられるようになった。

・生徒目線で Oral introduction や . コミュニケーション活動の構想を練れるようになった。

・今までは塾で教えていて個人への指導が中心だったので考えたことがなかったが、模擬授業を通してどんな生徒にも易しい進め方や板書法などを考えられるようになった。

・生徒の立場に立つのは口で言うよりむずかしいが、お陰で掲示の大きさ色分けも含め説明方法を工夫できるようになった。

2) コミュニケーションを意識した教師・生徒の英語使用

数は少ないが他の学生の模擬授業での生徒役や自分の模擬授業の中で実際に生徒とのやりとりを行うことを通して、身に付けたスキルについて記すことができた履修生もいた。

・生徒の発言を引き出すスキルが身に付いた。

・生徒への伝え方が向上したのではないかと

思う。

２ 授業実践：指導内容・指導法に関すること

授業の組み立てと、今回の模擬授業で重視した指導の考え方に関する記述が多かった。

1) 授業の流れや組み立て

授業計画を何度も練り直し、また模擬授業本番に向けた練習をする中で、あらたな視点や考え方を徐々に身に付けていったことが伝わる記述が多かった。

・模擬授業後は、必然性があるシチュエーション設定がある導入から practice、activity という流れが自分の中で確立された。
・時間配分を上手にできるようになる。
・今まで授業を受ける側の気持ちしか分からなかったが、模擬授業をやってみて授業の中の１つ１つの流れに意味があるということがわかるようになった。
・目的を持って授業をし、授業の組み立てに目を向けられるようになった。
・自然な流れを意識した授業作り。

2) 指導内容：音声や文脈・場面重視の口頭導入～コミュニケーション活動迄の指導

模擬授業で初めて英語による口頭導入をやった履修生の中にも、やったことで自信を付け始めていることを伝える記述が複数あった。

・自然な場面を想定した導入を作ることができるようになった。
・文法項目からその必然性があるシチュエーションを想像できるようになった。
・生徒がどうしたら理解してくれるか考えて口頭導入やコミュニケーション活動の構想を練られるようになった。
・楽しめる授業を作れるアイデアを得た。
・教えている塾ではあまり英語を使ってこなかったが、積極的に英語を使う授業を考えられるようになった。

３ 授業実践：授業運営や指導技術に関すること

特に指導技術に関わる点では、板書や掲示に関する内容に関する記述が多く、自分の模擬授業よりも他の学生の模擬授業から学ぶ記述が多かった。記述数は多いが内容が共通しているので代表的記述例とその要点を紹介したい。

1) 板書および掲示資料の活用：

・生徒役をやることで板書の構成を考える力が向上した。
・わかりやすい板書 / 板書の構成を考える力が向上した。
・自分ができていないこと、特に板書の方法が課題と感じていたが、他の学生の模擬授業から改善する方法もいくつか見つけることができた。
・生徒の立場に立って考えたお陰で、掲示の大きさ色分けも含め説明方法を工夫できるようになった。
・図や絵の使い方を他の模擬授業から学べた。
・イラストや絵などビジュアルの活用ができるようになった。

2) ノンバーバルな手法の効果：

・ 言語以外の技術を駆使した指導ができるようになった。
・ 掲示資料を利用した説明やボディーランゲージ（身振り・手振り・指さしなど）を

多く利用した表現方法を意識できた。

3) 言語活動の進め方やスキルの上達：

・まず全体から個人に繰り返させる、さらに生徒同士で、というような drill のやり方を身に付けた。

・生徒から発言や答を引き出すスキルを身に付けた。

4) 適切な話し方や発声ほか：

・声の強弱やトーンを変えることで抑揚のある授業を作ることができるようになった。

4.2.3 模擬授業全体を通した気づきと学びと今後の課題

今回の記述回答から模擬授業全般を通した気づきとして浮かび上がってきた３つのサブテーマについて、それぞれその分析結果と内容を最後に報告したい。具体的には、１ 自分自身について、２模擬授業経験の意味、３今後の課題や抱負、がサブテーマとなった。

１自分自身について

模擬授業のために周到な準備をし、何度練習してもいざ教壇に立つと予定外のことが起こる。生徒から期待通りの反応がかえってこない、授業が計画通りに進まないなど、難しさに気がつく。回答者の記述には、教壇に立って初めて自覚した内容が多かった。最も多い記述は、自分に不足しているや力不足に関する自覚であった。また理想と現実の大きな gap や、模擬授業を実際にやってから感じた内容が目立った。さらにその自覚から改善に向けた今後の課題に思い至り、それを記述した者も多く、注目できた。内容がかなり似通っていることが多かったので、ここでは典型的な記述例だけを紹介する。

1） 自分自身と力不足の自覚：

・実際に教壇に立ってみると、自分が準備した段取りも簡単にはできないことがわかった。

・まず自分の知識がまだまだ足りないと思うので英語の細かい所まで学び続けなければならない。

・そもそもの英語力が大きく欠落している。自分自身の英語力を向上させないことには何も始まらない。

・英語で言い換える力をもっとつけたい。

・生徒と近い距離感で授業を行えるコミュニケーション術と全般的な英語力が必要。

2) 理想と現実の gap：

・いかに自分の理想が高かったかを自覚した。

・イメージしていた授業と実際に出来た授業の差を実感した。

3) 不安・心配：

・私立しか知らないので心配である。もっと現状を知らないと。

4) 自分の信念やビリーフ：

記述の多くは、自分の抱いてきたイメージや、これまであまり気づいてなかった英語学習に関する自分の考えや信念、また過去の英語学習体験に基づく英語指導へのイメージとの違いに言及していた。さらに、戸惑いながらも新しい方法を受け入れようとする姿勢が伝わる記述も目立った。

・自分が学んだ授業とは異なるやり方を学んだ。

・自分の中学時代が自分のベースだったが、

模擬授業で必然性のある場面設定流れがわかる。

・分かり易くするには日本語を使用したほうがいいと思っていたが実際に生徒に英語を使用させる意義に気づいた。
・以前は分かり易い説明重要と思っていたが実際は文法項目の必要性をいかに生徒に気づかせるかが重要。
・固定観念を捨てることが重要であると思った。

２模擬授業経験の意味

模擬授業前の４回分の授業も含めて、模擬授業からの学びをあらためて振り返って、気付いたことや感じたことが記されていた。模擬授業の意義そのものを伝える記述もあり、各自の手応えを伝える内容が目立った。

・やはり大事なのは生徒の立場に立って考えることだと思う。自分が授業をしてみてよかれと思ってやったことでも学生からはよくないという意見をもらったり全く気がつかなかったことを指摘されたりした所はそういう目線があるんだと思って改善すべきだと思う。
・自分ができていないことを見つめ直すきっかけとなった。
・実践したからこそ分かったこと多い。
・やってみて分かる難しさだった。
・イメージしていた授業と実際に出来た授業の差を実感、先生と生徒間のやりとりや言葉で表せない距離感などやらないと分からないことを学ぶ。

３今後の課題と抱負

内容に共通していた項目を整理した結果、教育実習に向けた記述を含む６つの項目が浮かび上がってきた。模擬授業での学びや気づきを記した後のせいか、目的や理由を示した上で、授業力の向上に向けた自分自身の課題や教師としての姿勢、さらには今後の抱負への言及が顕著だった。最後の教育実習に関する項目では、実習に向けた履修生の前向きな姿勢も読み取れる。６つの項目それぞれの典型的な記述例だけを紹介し、結果報告としたい。

1）人間的成長：

・自分の可能性を広げるために、英語教育以外にも興味をもちたい。
・教師として、あるいは１人の人間として英語を通して何かおもしろい経験を積むということも非常に大切であると思っている。

2）英語や英語圏に関する知識や情報の増加：

・日々様々なことにアンテナを張ることが、生徒の興味を持つ話題や手段を用いることにつながると思う。
・英語の知識を増やし異文化交流することで、自分の引き出しを増やしたい。そうすることで英語やコミュニケーションの魅力を身をもって伝えることができると思う。
・実際に生徒に教える際のために彼らに身近な事の調査や背景知識の蓄積が必要。

3）生徒の理解と興味・関心の喚起：

・生徒の心をつかむにはどんな掲示資料を使えばいいかを考える。
・生徒のレベルに応じた指導を行うためにも生徒について把握したい。

4）自分の英語運用力の向上：

・特に speaking の力と語彙力を向上させるために勉学に励みたい。

5) 授業実践力の向上：

・前は生徒が楽しめればだけだったが、今は生徒に英語力をつける授業を行いたいと思うようになった。そのためのストックを増やしたい。

・実際に説明時や指導で使えるアイデアや導入のバリエーションを増やすために、沢山の授業を見たい。

6) 実習に向けて：

・自分の授業の強みと弱みを知ることができて、教育実習までにどこを改善しどこは今のままでいいのか明確になった。

・模擬授業を通して学んだ技術やこれからに活かせる改善点を考慮してもっとよい授業を構成し、実習では、模擬授業よりも生徒が楽しく学べる授業を作りたい！

・生徒のニーズに合わせた授業はどういうものか知るため他の教師の授業を考察し続けたい。

・全ての役割を行ったお陰で教師がすべきことが明確になった。何度も事前準備をして最高の授業をできる力量が教師には必要だと思う。経験知を高め理想の教師になれるよう努力したい。

5 考察と示唆

本研究の目的は、模擬授業とその省察を通した履修生の学びを明らかにすると共に、それを可能にした要因や方法を検討することであった。紙数の都合上掲載できなかったデータ結果もあるが、報告した質的研究の結果に基づいて、本章では、特に履修生の授業指導に関する洞察の深まりと教師に求められる複眼的な思考に焦点を当てる。そして、言語教師の認知（笹島，2014）の観点から、彼らの学びと成長のプロセス、さらにそれを可能にした要因や背景について検討し、考察を加えたい。

データ１が示す通り、履修生全員が模擬授業からの学びを肯定的にとらえていたことは、まず強調すべき点であろう。データ２の分析結果は明らかに、僅か 16 分間前後の自分の模擬授業については勿論、他の履修生の模擬授業からも多くの学びがあったことを示しており、この高い数値（M=4.41）を裏付けるはずだ。またこれらの学びに、録画映像や履修生間のフィードバックが大きく寄与していることをデータ１の結果は示す。ここからは、数値に裏付けられたデータ２の分析結果に基づいて、特筆すべき４つの観点から模擬授業を通しての気づきや学びについて考察し、それを可能にする要因を探る。

１学び手の視点に立つ授業作りへの視座

学習者目線を重視することへの言及は予想以上に多かった。彼らが大学生として今、学ぶ側で日々の授業を経験していることを考えれば、これは確かにさほど不思議なことではない。模擬授業からの学び、という点でより重要なのは、実際に授業をする上でこれが何を意味するのか、学習者目線を回答者がどう捉えているかであろう。今回の分析結果からは、興味などの動機づけの喚起（Dornyei & Ushioda, 2011）から、

双方向のコミュニケーションの進め方、さらに生徒目線の指導法や情報の伝え方まで、学び手の視点に立つ分かり易い授業を具体的に追求しようとする履修生の姿勢と学びの深化を読み取ることができた。だが一方で、複数の履修生が挙げた授業の「楽しさ」については、印象に留まる記述が目立ち、具体的な根拠や指導方法を示し切れていない。「楽しさ」の本質をより掘り下げて考える視点が必要であると言えよう。

2 授業における教師役割や求められている資質への気づき

教師役割の気づきは前述した学習者視点と表裏一体をなす。教師次第で「生徒のコミュニケーション能力は高めることも低めることも出来」、「教え方は無限に広がる」、という回答者の認識はまた、教師の仕事の大変さへの気づきにもつながっていた。さらに、教師には英語力のみならず短期間では身に付かない様々な資質が求められている（江原 , 2015、神保他 , 2011、木原 , 2012、石田他 , 2013）ことへの認知、さらにそれを言語化できたことがやはり重要である。予期せぬ生徒の反応に対応できる創造性や臨機応変さといった様々な資質についての指摘もあり、口頭のやりとりが多い英語授業に特に必要な、授業中のリフレクション（木原 , 2012）への気づきを反映しているとも言える。だが同時に、実際の授業指導場面において複眼的思考を実践することがいかに難しいか、履修生があらためて自覚したことも明らかになった。言うまでもなく、教師に必要な複眼的視点は、机上で理論を学ぶだけで身に付けることはできない。今回の結果は、模擬授業期間中に担当者が感じていた彼らの成長－学び合いと協働の中で自他の模擬授業を体験し、様々な視点から冷静に振り返りを行う過程の中で、授業を客観的に捉える視点を履修生が徐々に身に付けていったこと－を裏付けるものであった。

3 授業指導についての学び、および信念ビリーフとの対峙

今回の模擬授業では、導入から産出活動までの指導を中心としたが、中でも使用場面を意識しながら英語を用いて行う文法項目の口頭導入が、重要な到達目標であった。「英語で」行う授業については、近年英語科教育法を学ぶ学生の間でも一定の認知はあるが、英語で授業をすることが即コミュニケーション能力の育成につながるわけではないのは自明である。授業の中でのコミュニケーションをどう捉え、どのような言語活動を通してその力を育んでいくことが求められているのか、この模擬授業には、生徒の意味ある英語使用を促す観点から「英語で」授業の意図を捉え直す視点を、模擬授業を通して学ばせたいという授業指導者（＝筆者）の意図があった。

しかし本番の模擬授業に向けて各自が授業を作り上げる過程で、履修生の中には、自分がこれまで漠然と、あるいは明瞭に抱いている授業指導観を意識せざるを得なかった者がいたことを結果は伝えている。模擬授業が到達目標とする文法項目の口頭導入を中心とする授業指導は、履修生が理想とする、あるいは過去の学習体験から想起する英語授業の指導法とは、必ずしも一致していない。それどころか前章でも一部紹介したが、記述に散見した「これまでと異

なる」「経験したことがない」「新しい」等の言葉は、口頭導入自体の経験が全く無い履修生もいたことを示し、事実その通りの記述もあった。つまり今回の模擬授業で、過去の学習経験に深く根付く自分の「信念（長峰 , 2011）」や「ビリーフ（Nagamine, 2006、稲葉 , 2014）」と対峙し、あるいは新たな指導への挑戦に迫られた履修生も少なからずいたことが分かる。

このような体験とも向き合いながら取り組んだ実際の模擬授業からの指導に関する学びとは、あらためてどのようなものであっただろうか。

模擬授業では、扱う文法項目は同じでも、導入から展開に至るまで、その内容や指導手順は履修生によって異なる。自他の模擬授業を体験し、さらに省察することで、履修生は、自身の信念やビリーフとも対峙しながら、授業で求められていた場面のある口頭導入を工夫し、双方向性のある教師の英語使用についてより実践的な学びを深めようとしていたと言える。また履修生の気づきと学びは、一般的に英語の授業指導に必要とされる多岐に渡る項目（横溝 , 2009、神保他 , 2011、JACET 教育問題研究会 ,2014、石田他 , 2013、岡田他 , 2015）をかなり網羅していたことがわかる。そしてこれを可能にした背景には、模擬授業前の計 2 回、授業時間を使った授業指導や 2 段階に分けての指導案作成ステップ、さらに学び合いの中での細案の練り直しや本番に向けた熱心な練習があった。たとえ模擬授業経験の回数が少ない履修生であっても、そのような試行錯誤を経て自ら苦労して模擬授業を作り上げる過程を辿り、また自他の模擬授業についての振り返りを通して学びと理解を深めたことこそが、授業指導についての新たな学びと成長、即ちリフレクティブ・プラクティスを促したと言ってよいであろう。さらに 3 回に分けて異なる形で時間を置きながら行った振り返りも又(直後のリフレクション、2 週間後の「振り返りシート」、全模擬授業終了後の「アンケート課題」）模擬授業をより客観的かつ批判的に視る目を養い、深い省察にも貢献したことは、9 割を越える履修生が「模擬授業を行ったことが自分の授業力を向上させる上で役に立った」と結論を出したデータ 1 の結果やデータ 2 の記述から明らかであろう。

4 未来志向の学びと省察

最後に、各履修生の学びと今後の成長を示唆していると思われる点に言及したい。模擬授業に対する履修生それぞれの認知は、只何がうまくいった、いかない、という次元に留まらず、模擬授業を通した自分の教師としてのあり方と向き合い多角的な視点から内省し、次の実践につながる課題を見出そうとする、まさにリフレクティブ・プラクティスの姿勢に通じるものであった。

結果が示すように、履修生の学びは、英語力増強や指導法に関する知識の増加、スキルの向上などの授業指導に直接関わる項目への視点に加え、授業に臨む姿勢や人間的な成長など、まず今の自分に不足している視点や力を直視し、今後必要となる自らの課題と共に、その為に何をすべきかまで視野にいれている。これはまさに「教師の成長」（玉井 , 2009b、横溝 , 2009、長峰 , 2011、神保他 , 2011, 石田他 , 2013）に不可欠な自律的教師をめざす視点として注目に値

する。限られた条件下でも、彼らは自他の模擬授業から学び、リフレクション・コメントや教員コメントも参考にしながら模擬授業についての段階的な振り返りを重ねた。この自律的な内省（笹島 , 2014, 2016）の姿勢を育てる過程こそが、自らの力不足や現在の課題を自覚させ、今後の課題に繋げる視点を育てる大きな要因となっていたと言えるだろう。換言すれば、模擬授業は履修生各自が目指す授業を近い将来実現するための、貴重な省察の機会を提供した。模擬授業を通して彼らは未来の教師として「成長プロセス」（長峰 , 2011）の大きな第一歩を踏み出したとも言えるだろう。

しかしながら、授業実践の機会の不足を心配する記述に表れていた通り、履修生の授業経験は圧倒的に少ない。彼らの認知には経験からくる裏付けが不足していることも又事実である。言葉で表現できることがそのまま授業実践に活かせるわけではない。今回の学びをより実質的なものにしていくためには、自らの課題に対する真摯な取り組みと共に、それを活かす豊かな授業実施経験が今後必要なことは明らかである。

本研究結果は、協働と学び合いの中で行われる自他の模擬授業体験とリフレクティブ・プラクティスの視点に立つ省察が、教職課程に学ぶ履修生に重層的な深い学びと未来志向の自律的成長プロセスを促す貴重な契機となり得ることを示唆した、と言ってよいだろう。

6 今後の課題

本研究によって、教職課程で学ぶ履修生が自分や同じ立場にある履修生との学び合いの中で自他の模擬授業を体験し、さらにリフレクティブ・プラクティスの視点に立つ省察を段階的に行うことが、教師の授業実践や指導についての重層的な深い学びを引き出し、自律的成長プロセスを促す貴重な契機になり得ることが、一定程度示されたと言える。だが、本研究に参加した履修生の数は少なく、対象となった２つのデータの情報量も限られている。研究によって模擬授業に対する履修生の学びの全容とその傾向をある程度まで捉えることはできたが、外国語学習への影響が大きいとされる過去の英語学習経験や学習者ビリーフ（稲葉 , 2014）やそれぞれの背景など、履修生１人１人の違いを本研究で扱うことはできなかった。これらについては今後の課題として別の機会を設けて論じたい。さらに今後は、過去の模擬授業経験回数や録画映像視聴回数などとの相関に加えて、自律的な省察を促すリフレクティブ・プラクティスやアクションリサーチ（長﨑 , 2009）の研究、さらに J-POSTL（2011）をはじめとする省察に有効なツールを探り、模擬授業からの学びについて、詳細かつ客観的裏付けのある研究をしていく必要があるだろう。

模擬授業を通した学びを探った本研究は、しかしながら、単に研究に留まらず、英語教師をめざした自分の在り方と向き合って今後の課題を考える、省察する履修生の姿を映し出した。事前の学習から最後の振り返りまで模擬授業全体の過程を辿る中で紡ぎ出された数々の履修生の言葉は、模擬授業を通した学びの本質とともに、自律した教師としての彼らの成長の兆しをも示している、とも言えるだろう。豊かな学び

と成長につながる模擬授業をより充実せるためにも、その機会を保障する環境と諸条件が今後さらに整えられていくことを、教職を担当する1人の教師として切に願うばかりである。

本研究は授業指導者である筆者にとってもまた、自らの教職課程の授業を省察するたいへん貴重な機会であった。履修生の記述の言葉をそのまま最後に付記したい。「教師という仕事の魅力をあらためて感じることができた」。

参考文献

安達仁美（2013）『教員養成における授業研究』的場正美、柴田好章編『授業研究と授業の創造』123-138, 渓水社

Dornyei, Z and Ushioda, E.（2011）, Teaching and Researching Motivation 2nd edition.Harlow : Pearson Education.

江原美明（2015）「英語教師論」岡田圭子他『基礎から学ぶ英語科教育法』20-34, 松柏社

石田雅近 , 小泉仁 , 古家貴雄（2013）「新しい英語科授業の実践」金星堂

稲葉みどり（2014）「外国語学習のビリーフの考察－愛知教育大学1年生の場合」149-156, 愛知教育大学教育創造開発機構紀要 vol.4 March 2014

木原俊行（2012）「授業研究と教師の成長」水越敏行他『授業研究と教育工学』30-60, ミネルヴァ書房

及川 賢（2013）「ビデオによる授業研究部会を用いたフィードバック～大人数にオーラルイントロダクションを実践させる工夫『英語教育』, 2013年7月号 10-11, 大修館書店

JACET 教育問題研究会（2014）『言語教師のポートフォリオ（J-POSTL）【英語科教職課程編】

神保尚武他（2011）「英語教師の成長：求められる専門性」大修館書店

Nagamine, T.（2008）Exploring preservice teachers' beliefs：What does it mean to become an English Teacher in Japan? 11-27 Saarbrücken, Germany: VDM

長峰寿宣（2011）「教育実習生の成長および認知」13～28, 言語教師認知研究会『JACET 言語教師認知研究会研究集録 2011』

Nakata, Y（2006）Motivation and Experience in Foreign Language Learning. Bern: Peter Lang AG, International academic Publishers.

長﨑政浩（2009）「教師を育てるアクションリサーチのすすめ」『英語教育』大修館書店

笹島茂（2009）「英語教師として自分を見つめる：言語教師認知の視点」」『英語教育』2009年3月号 13-14, 大修館書店,

笹島茂（2014）「言語教師認知の動向」開拓社

笹島茂（2016）「教師認知の研究を活かしたティーチャー・リサーチ（TR）」『英語教育』2016年6月号 25-27, 大修館書店

高木亜希子（2015）「英語科教職履修生による省察～言語教師のポートフォリオ J-POSTL を用いて～」『Language

Teacher Education 言語教師教育』2015Vol2 NO159-77, JACET 教育問題研究会

玉井健（2009a）「リフレクティブ･プラクティス」吉田達弘他編『リフレクティブな英語教育をめざして』119-190, ひつじ書房

玉井健（2009b）「リフレクティブ・プラクティスと教師の成長」『英語教育』, 2009 年 3 月号 10-12, 大修館書店

横溝紳一郎（2009）「教師が共に成長する時－協働的課題研究型アクション・リサーチのすすめ－」吉田達弘他編『リフレクティブな英語教育をめざして』75-118, ひつじ書房

補遺

表１　「データ１の集計一覧」

質問	回答者数 ア)	イ)	ウ)	エ)	オ)	合計	平均
質問 1「あなたは今回のMT以前に、英語の模擬授業を行った経験がありますか」	1	1	1	15	6	24	1.1 回
＊質問1への回答の選択枝：　ｱ) ４回以上ある　ｲ) ３回ある　ｳ) ２回ある　ｴ) １回ある　ｵ) 今回のMTが初め							
質問 2「模擬授業の録画映像は、自分が模擬授業をふり返る上で参考になったと思いますか」	10	14	0	0	0	24	4.41
質問 3「他の学生からのコメントは、自分の模擬授業をふり返る上で参考になったと思いますか」	11	11	2	0	0	24	4.37
質問 4「授業で自分が模擬授業を行ったことは、自分の授業力を向上させる上で役に立ったと思いますか」	12	10	2	0	0	24	4.41
質問 5「模擬授業全体を通して、授業について新たに学んだ、あるいは気付いたことがあったと思いますか」	1	17	5	0	0	24	4.16
＊質問2～5への回答の選択枝：　ｱ) 大いに思う　ｲ) 思う　ｳ) どちらとも言えない　ｴ) あまり思わない　ｵ) 全く思わない							

資料１　Micro-teaching（＝MT）の「振り返りレポート」

＊自分(たち)の MT について**「振り返りレポート」**を各自以下の要領でワープロで作成し、MT 後**２週間以内**に、授業録画 **USB（ペアで１本）と他学生からのコメントシート**と共に提出して下さい。

◆提出日時：自分(たち)の MT 実施から２週間後迄の授業時 ※USB は後で返され

◆書式：下の＜見本＞を参考に A4 版　横書き 1 枚(**両面可**！)、ワープロで作成する

・＜見本＞の通り**タイトル等は一番上、氏名、専用番号等**は一番下に入れる

・字数：**1,200～1,600 字、サイズは 10.5pt 前後、**余白：上下左右 **25mm**

◆内容

・次の **1～6 の項目全てについて、各自が自分の MT を振り返り、レポートを作成する**

・項目 2 と 3 は 300～400 字程度、その他、4 以外の項目は 200～300 字程度にまとめ、全体で 1,200 字～1,600 字以内にまとめる。※最後に文字数を示す。また A4 版両面 1 枚以内に収める

・各項目を必ず書いた上で、それぞれについて自分の考えを述べる

1. 指導案の狙いと工夫：立案時に何を狙い、どんな工夫をして MT に臨んだか

2. 他学生・担当教員のコメント：**1)良かった点、2)改善点を分け**指摘された内容のポイントを

3. 自分の MT 振り返り：1、2（↑）をふまえ、自分の MT の良かった点と改善すべき点を、

1) 内容 2) 指導技術 (板書、説明方法など)、3) その他、の 3 つの観点から振り返る

4. MT 総括：今回の MT を総括するなら、自分では次のどれに該当すると思うか

1)｛全ての点で / 大体は/ 半分程度は/ 少しは｝自分の狙った通りの授業ができた。

2)｛ほとんど/ 全く｝狙ったような授業ができなかった。

5. 総括の根拠：上記 4（↑）と自分が総括する理由

6. 今後の課題：上記 1～5 全てをふまえ自分の英語授業指導の今後の課題を述べる。

最初に各項目(番号を含む)を書く

＿月＿日実施 MT の振り返りレポート＜見本＞

201 年＿月＿日提出

1.　指導案の狙いと工夫：

2. 他学生・担当教員の担当コメント

1)良かった点：

※途中は省略

6. 今後の課題

1)

2)

最後にレポートの**総文字数を書く**

＊総文字数（　）文字

アルファベットと数字の組み合わせで示された各ペアの記号　[例] A－２

MT 記号(---) 専用番号(　)氏名(　　)